

三岸節子〈短歌ポスト〉 入選作品 (平成三十年後期分)

選者 小塩卓哉 (中部日本歌人会顧問)

【優秀作】

アンダルシアの坂道

ひたすらに描き続ける悲しみを受け容れている白きキャンバス

愛知県北名古屋市長 浜田 静江

〈評〉「ひたすらに描き続ける」は第三句の「悲しみ」にかかっている。この歌は絵画の主題を扱うというよりは、暗いタッチに触発されているようだ。白いキャンバスに向き合うときの節子の緊張、そして受容の気持ちを見事に表現した歌。

*雲と海の対話 (嵐) *

崩れ落ち海にのまるる氷山に未来をうれふ吾又老ひて

愛知県稲沢市長 大熊 信吾

〈評〉何と言つても結句の「吾又老ひて」が読む者に深い印象を与える。この作者は、何度も美術館を訪れこの絵を鑑賞しているのだろう。終末観を漂わせるようなこの絵を前にして、次の世代の未来を憂慮せずにはいられない作者なのである。

ブルゴーニュのブドー畑

フランスのぶどうの色はかまくらのあじさい色とくくらべてみかし

愛知県清須市長 水田 文枝

〈評〉鎌倉と言えばあじさい寺の名で知られる明月院をはじめあじさいの名所が多々あるが、あじさいの青と節子の絵のワインレッドとを引き比べている。葡萄畑と神社仏閣のあじさいとは何ら関係はないのだが、自分が自然から圧倒された体験が、絵を見ることでフラッシュバックしたのであろう。

*飛ぶ鳥 (火の山にて) *

うみのそこ はねをやすめたとりのゆめ つきとほしとに だかれてゆれる

愛知県知多郡阿久比町 江村 和彦

〈評〉この絵を描いた節子の心象を短歌に歌い取ったと言えるだろう。「飛ぶ鳥」の連作の中で、この絵はまさに海底で鳥が羽を休めている印象がある。平仮名書きにしたことで、絵画の静謐な印象を短歌に写し取っている。

アンダルシアの坂道

人も無くアンダルシアの坂道を黙々として失意の果に

愛知県名古屋市長 河村 剛ちよ

〈評〉作者は節子の描く絵画の中に入り込んでいる。確かに人気のない坂道である。この坂道に染み込んでいる歳月を意識するからこそ、「失意の果 (はて)」の結句が思い浮かんだのだろう。もちろん意気揚々と坂を駆け上がった人もあるのだろうが、この絵のトーンはむしろ悲哀に満ちた人生を想起させる。

花

赤い花炎の如く咲き誇るあつき血潮の燃え盛るころ

愛知県高浜市 加藤 茂世美

〔評〕花は節子の生涯をかけたモチーフである。若いころにはその熱い血潮のたぎる思いを炎のごとくキャンバスにぶつけていたことであろう。人生にはそのような時期があることを作者は我が身に照らして思っている。

【佳作】

月夜の縞馬

大勢の人さまよえる人の世に道を示しし月夜の縞馬

三重県鈴鹿市 仲見 孝

小さな町（アンダルシア）

赤き屋根の数だけ暮らしあることを思へりアンダルシアの坂道

愛知県一宮市 村井 敬子

もや

あまごいに天の神様しつとしてぐれんのほのほをもやしつづける

愛知県名古屋市 須之内 洋文

アンダーソンの壺と小鳥

ふたりしてかごのなかにてすごしてるそとはさむいがこころあたたか

愛知県一宮市 森 健二

とうもろこしと魚

魚かなとうもろこしより大きくて白眼赤はら二つのしっぱ

一宮市立浅井北小学校 岩本 幸大

花

キャンバスで叫びうずまく節子の火さあ燃えあがれ自由を求めて

一宮市立今伊勢中学校 森 千紘

ブルゴーニュにて

からすのむれなの花見てる春の日に一緒に見てたのしかったよ

一宮市立三条小学校 尾崎 香春